久しぶりのパリ

久保田雅子

　気候のさわやかな１０月に、しばらく住んでいたパリへ行くことにした。
　準備が以前よりも、あわただしく大変で、出発前から疲れてしまった。年を取るとなんでもが少しずつ大変になってくるのかもしれない…、と思いながら一人リムジンで成田空港へ向かった。
　１２時間近く飛行した後、パリのシャルル・ド・ゴール空港に到着。空港の様子が以前とはすっかり変わっていた。空港のなかを電車が走っている。
　パリはもう寒いと思っていたのに、東京と同じようにむし暑い。
　税関を通過して到着ロビーに出たが、迎えに来ているはずの友人がいない。私がいつも滞在するのは、彼女の持っているアパートだ。
　電話をかけようと試みたが、出発直前に携帯をスマホに替えているため、海外での使い方がよくわからない。パリの市外番号が思い出せない。３３１？
　０１？
４０分たっても５０分たっても友人は現れない。おかしい…。予定通りの到着なのに…。私は到着日か時間を間違えて連絡したのかしら？
　手荷物の中のパソコンで、自分の送信メールを確認したかった。だが、まわりに人が大勢いて荷物を広げる事がためらわれた。なんども電話を試すがつながらない。
　２時間近く待った。変だ。不安になってきた。どうしよう…。
　直接彼女の家へ行くことにする。タクシーはいくらぐらいだったかしら？思い出せない…。とりあえずユーロが必要だ。銀行はどこかとたずねると、出発ロビーにしかないという。

ここは１階到着ロビーだ。スーツケースを押して３階へ。脱いだコートや手荷物で汗びっしょりになった。（パリは寒いはずだったのに…）
　ユーロを手に、また１階到着ロビーのタクシー乗り場へ向かう。（疲れた…）
　タクシーに乗ってしばらく走ると、反対車線が大渋滞している。
　運転手さんが、空港に向かう高速道路で事故があったと説明してくれる。彼女はこの渋滞のなかを、まだ空港に向かっているのかしら？
　タクシーのなかから、ようやく彼女の家に電話をかけることができた。
　彼女のご主人が電話に出て「彼女はいま空港に着いたところだ、空港から電話をしてくれればよかったのに…」と残念そうに言った。

　翌日、食料を両手いっぱいに買い物して帰ってきたら、アパートの入口でドアが開かない。（フランスは防犯が厳しく、建物のなかには住人しか入れない。さらに必ず２重ドアになっている）以前に使っていた４ケタのコードを何度押してもびくともしない。
　（家に入ることも出来なくなった…）と、なんだか情けない気持ちになった。
　しばらくして同じアパートの顔見知りのマダムが帰ってきて、ようやく一緒に入ることが出来た。
　「もうコードではなくなったのよ」と、キーホルダーでのタッチの仕方を教えてくれた。

　パリ郊外に住む友達に、久しぶりにパリ着を知らせる電話をした。
　日曜日にノルマンディへの日帰りバス旅行に誘われた。
　よろこんで参加を希望した。朝７時３０分に集合だ。
　早朝なのでタクシーを予約することにした。
　パリの７時すぎはまだ真っ暗だ。８時を過ぎてようやく明るくなってくる。
　もし予約したタクシーが来なかったらどうしよう…と急に心配になる。
　空港でのパニックが、翌日のカギの出来事が、私を不安定な気持ちにさせてしまっている。以前、この街で暮らしていた自分が、いまの自分と重ならない。数えてみると５年ぶりだ。５年もたてば街が変わっても不思議ではないが、私はすっかりこの街から遠くなっている。（慣れ親しんだところのはずなのに…）

日曜日はノルマンディの美しい風景のなかで、久しぶりに会う友人達と楽しいおしゃべりの１日を過ごした。おかげで不安定な気持ちはだいぶ落ち着いた。

３週間の滞在後、以前の自分を見失った少し寂しい気分のまま、深夜便で帰国の途についた。